

生活の中の
仏教語

「験(げん)をかつぐ」と修験道 その①



ほっと通信編集委員 金城 隆覚

私たちが生活する中で何気なく用いている言葉や風習には、実は仏教や神道由来のものが数多くあります。今回は日本人なら一度は頼ったことがあるであろう「験(げん)かつぎ」と修験道について、二回に分けて触れてみたいと思います。

まず、「験かつぎ」の語源については諸説ありますが、「験」の意味を漢字源辞典でみると次のように書かれています。

- ① {動・名}ためす。実情を知るために色々なことをとりまとめて調べる。
- ② {名}しるし。良し悪しや真偽を試してみる証拠。
- ③ {名}しるし。試した結果としてあらわれたもの。仏道の修行を積んだしるしとしての
靈験。効験。
- ④ {名}しるし。きざし。兆候。

この中で、「験をかつぐ」と関連が深いのは③の意味でしょう。「験をかつぐ」という言葉は、修行の成果として現れる靈験やその結果としてのご利益を求める行為を指します。これには、初詣や受験、就職の合格祈願、スポーツの必勝祈願など、さまざまな願いを神仏に託す場面が含まれます。年始に縁起物を食べたり、特定の儀式を行ったりして願いを叶えようとするこれらの行為は、仏教や神道に由来する伝統と精神であり、今日まで続いています。

「験をかつぐ」の習慣は修験道と深い関係があります。修験道は、「役行者(えんのぎょうじゃ)」「(役小角(えんのおづぬ))を仮の開祖とした日本独自の宗教で、古神道由来の山岳信仰と密教、道教、儒教などが融合、発展した宗教です。特徴は、「験力(げんりき)」を得ることで神仏の加護を得る現世利益を追求する点です。

平安時代には、弘法大師空海や伝教大師最澄が密教に基づいた修行法を広く推奨し、修験道は全国で盛んに広まりました。行者は「山伏(やまぶし)」と呼ばれ、特に「験を修めた者」は「修験者」や「験者(げんざ)」として尊敬され、各地の霊場で修行を積みました。修験道は加持祈祷や伝統文化の普及とともに、権力者にも認知され、社会的に重要な役割を果たしました。

明治時代には修験宗廃止令が出されましたが、多くの修験者が修行を続け、今日に至るまで修験道の精神は生き続けています。修験道の聖地として有名な場所は、奈良県の大峰山脈、京都府の比叡山、出羽三山など日本各地にあります。これらの場所では修験道の教義と日本の誇るべき精神が伝えられ、今も「験をかつぐ」行為が根付く礎として守られているのです。

もし「験をかつぎたい」と思うのであれば、近隣の神社仏閣に参拝し、縁起物を食べるのも一つの方法です。日常生活に信仰の力を取り入れることで、意外な場所で験をかつぐ機会が見つかるかもしれません。次回は「験をかつぐ」について、一般的に行われている方法などに着目していきたいと思います。

千葉県富津市 真言宗智山派 福聚院副住職
宮城県名取市在住

(1109字)